特集　食と農をめぐる環境教育（その１）

人間環境は「空気」「水」「光」など、さまざまな要素（要因）から成り立っているが、動物の一員である人間にとって「食べもの」も重要な環境要素の一つである。その「食べもの」が私たちの口に入るまでには「生産」（ここには農業のような「つくる」ことのほかに、漁猟など「とる」も含める）から「加工」・「流通」、そして「消費」へと進む段階があり、それら各段階においても「人間にとっての環境」という視点で扱う必要の事象がいくつも見られる。「加工」を例にすれば、さまざまな食品添加物の抱える問題など。その意味から、これら一連の過程をひろく「食環境」として扱うことが望ましいといえよう。

環境教育では人間環境やそこで生じている環境問題への関心や理解を深めることをめざして、それらを題材にした学習が展開されているが、これまで、ともすると忘れられがちであったものが「食環境」に関する学習である。もちろん、従来から農業科、技術科、あるいは理科の一部などで農業に関する教育が、また、家庭科、保健などにおいて「食べもの」に関する教育が行われてきているが、人間環境という視点で、また「生産」（来し方）から「消費」（行く末）までを一体化した形で考えさせる学習は必ずしも十分ではなかった。

上記のような立場から「食環境」に関する教育の必要性を認識した本学会会員の有志は第５回大会（甲南大学）以来、大会の開かれる都度、小集会を開き、各地の実践者を交えて当該教育の現状を紹介しあい、課題の検討を重ねてきた。その様子については本特集の一部として次号で紹介する。

一方、最近では、農水省や文部科学省など各省庁でも「食」や「農」に関する教育に関心を向けるようになり、具体的な活動が展開され、その延長ともいえる「食育基本法」制定の動きも見られるようになった。

こうした時点で、環境教育の視点から「食」や「農」に関する教育について学会員がどのように考え、どのような理論的・実践的研究を展開してきているかを学会誌上で公開し、会員の皆さんにこの分野についての今後のあり方をご検討いただくことが望ましいと考え、特集を組むことにした。

今回、この特集を編集するにあたっては、従来のような依頼原稿のみに依存するのでなく、広く学会員に投稿を呼びかけ、できるだけ多様な考えや実践などを集めることをめざした。おかげで、多くの原稿が集まり、充実した特集とすることが出来た。そこで、今号は、「食環境」に関する教育の理論的、実践的研究報告や実践記録などを掲載し、次号で、それらを受けて、「食環境」教育の全体像の分析や課題を総括することにした。会員の皆さまにはご一読の上、積極的なご批判、ご意見をお寄せくださるようお願いする。

最後に、今回の特集にあたってご投稿、ご寄稿いただいた方々に謝意を表する次第である。

（特集編集担当　阿部道彦・佐島群巳・鈴木善次・原田智代・本庄眞・渡辺隆一）